成瀬巳喜男のファンダメンタルズ、そしてその疑問と解明（1）

久々に見直した成瀬巳喜男の「銀座化粧」（1951）「浮雲」（1955）「女が階段を上がる時」（1960）は、さすがに成瀬巳喜男の一つのピークを迎えた時期に撮られたもので、特に「浮雲」の男女の恋愛感情の描写は淡々としながらも、その実火花を散らす壮絶な戦いであり、そこからはやるせなさ、いたたまれなさが錐で突かれるような痛みを伴って伝わってきます。

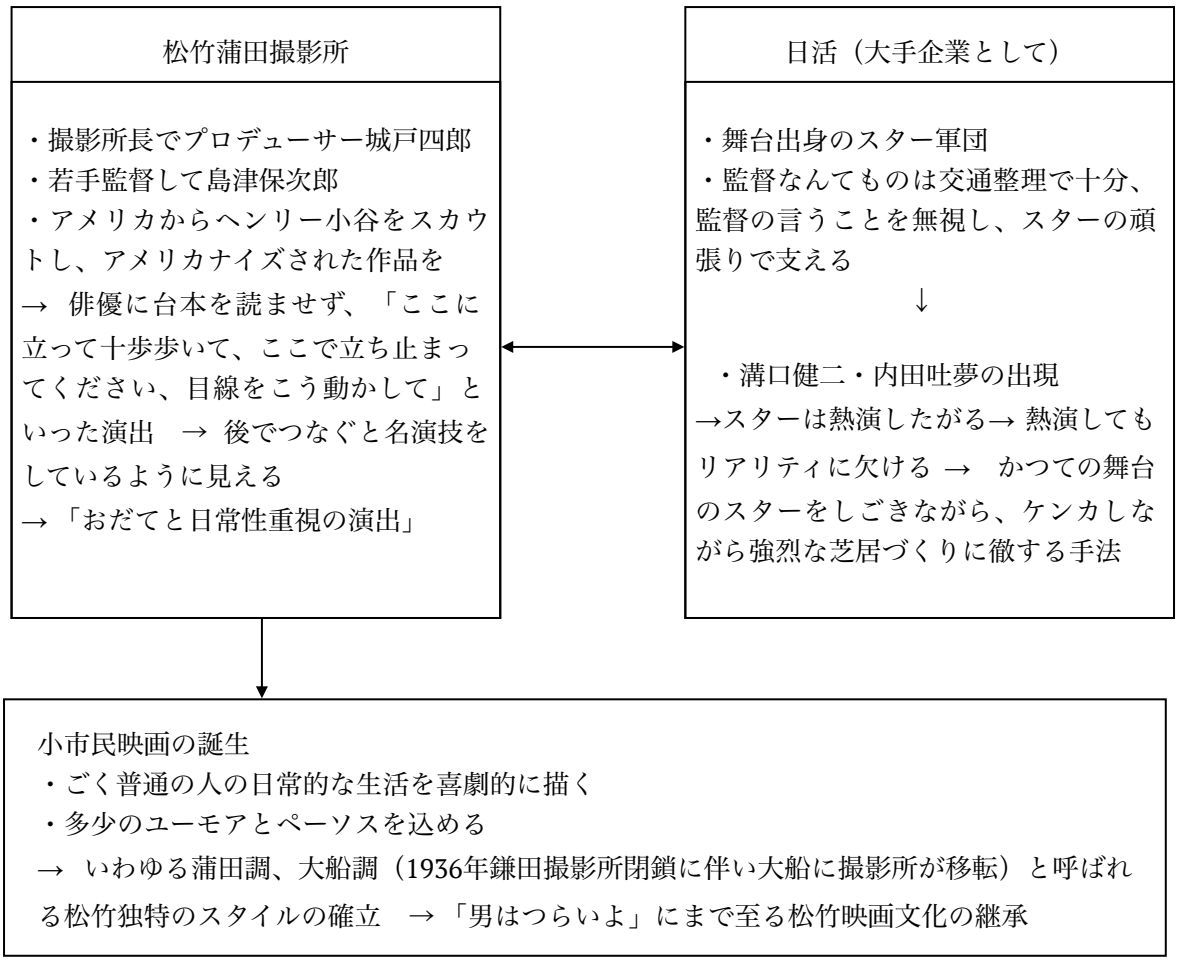
成瀬巳喜男に限らず数多くの映画作家についての研究や批評（例えば成瀬巳喜男論といった類のもの）はすでに出揃っていて、何を今さら論じることの無力さを感じない訳にはいかないのですが、これから述べることは、すでに発表された批評に対しての批評であり、新味に欠けることは否めないのですが、そこから成瀬作品の魅力を伝えられればと思います。成瀬巳喜男という映画監督の存在は実に大きく、決して埋もれてしまうような存在ではありません。ただ、一般的に見る機会が限定されているということです。

成瀬巳喜男の映画監督としての活動は、1930年から1967年という永きに渡り、全部で89本の作品を発表しています。この内、22本がサイレントの作品です。最初のトーキーの作品は、1933年の12月31日に封切られた「謹賀新年」なるもので、当時の松竹の大谷社長、城戸撮影所長以下、蒲田撮影所専属俳優たちの新年のご挨拶を撮った作品で、当時成瀬巳喜男の置かれていた状態を暗示させるものです。

川本三郎が淀川長治に「成瀬巳喜男は好きですか」と訊くと、淀川長治は即座に「いやよ、あんな貧乏くさい監督」と笑いながら言ったといいます。ここで、川本三郎は成瀬作品の特徴をよく言い当てていると思ったと書いています。（川本三郎「成瀬巳喜男 映画の面影」）成瀬巳喜男の人物評としてあるものには、とにかく無口な人で、撮影はきちんと定時に始まり定時に終わる、必要なこと以外は話さない。大袈裟なことが大嫌い。仲代達矢には「つまらないテクニックは使わなくていい。なるたけ静かに演技してね。立ってるだけでいいから。黒澤君ところでやっているような、ああいう大袈裟な演技はしないでね」と釘をさす人なのです。撮影に入る前に脚本を見直し、直しと称して大半のセリフを削ってしまう人でもあり、その脚本は真っ黒になってしまっています。（中古智/ 蓮實重彦「成瀬巳喜男の設計」に実物の直しとカット割りの入った台本の写真が掲載）陰で「いじわるじじい」と言われたのは、そのせいだけではなかったでしょが。そしてまた、成瀬巳喜男の作品は小市民映画とも言われています。

1.「『小市民映画』の成り立ちと特徴とは」

そこでまず、成瀬作品の特徴とも言える「『小市民映画』の成り立ちと特徴とは」について考えていきます。そして、その前提として日本映画の黎明期にまで遡ることにします。日本の映画産業が産業らしい形になったのは大正時代の初め（1912年以降）と言われ、大衆演劇的、歌舞伎的、新派的特徴のものでした。大正時代の終盤（1922年ごろ）から日常的リアリズムへの目覚めが起こります。要はアメリカ映画のようにもっと日常的なものをきちっと撮らなければならないという気風で、基本はリアリズムということになります。具体的には、女形をやめる、活弁をやめるという方向性が打ち出されます。こうした中で、松竹蒲田撮影所が1920年に発足します。進取の気象に富んだ大きな新たな流れがここに誕生します。

ここでキーマンとなったのは、1920年に松竹がハリウッドから迎えたヘンリー小谷（1887~1972）です。広島出身の小谷は幼少期に両親とハワイ、サンフランシスコに移住。1913年ごろに映画界に入り、初めは俳優そしてカメラマンとして後にセシル・B・デミルの撮影助手として活躍。当時の排日運動とユニオンへの加入が認められず活動は限られようですが、それでもハリウッドの大物撮影監督ジェームス・ウォン・ハウ（1899~1976）を育て上げた実績があります。（ハウは、フィルム撮影の黄金期を駆け抜けた撮影監督たちによる貴重な証言集で世界的に愛読される伝説的名著とされる「マスターズ・オブ・ライト」の中でも複数の撮影監督から参考とされ、取り上げられることの多い中国系の撮影監督。代表作は数多く、その中にはマイケル・カーティス「ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ」（1942）ジョン・スタージェス「老人と海」（1958）ハーバート・ロス「ファニーレディ」（1975）等があります）小谷の松竹での活動は意外に短く、翌年の1921年には松竹を去ってしまします。日本映画界の撮影技術の礎を築いたのみならず、グリフィス・システムを導入し多くの映画監督に大きな影響を与えました。佐藤忠男は、この演出方法を徹底的に行ったのが小津安二郎だったと指摘します。

それでは、佐藤忠男の語ったところによると、この演出システムを取り入れた松竹と当時の映画会社の大手として君臨していた日活とを比較してみると次のような対比が浮かび上がってきます。（2005年5月28日「成瀬巳喜男生誕百周年記念シンポジウム 第 1 部「成瀬映画の魅力を語る」から「成瀬映画の技法とディテールについて」を基に）また、それが発端となり「小市民映画」が誕生します。